

沖縄大学 二〇二二年度 一般選抜 (中期)

国語

※答えはすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

※なお問題文は、斎藤孝著「身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生」

(二〇〇〇年、NHKブックス)の一部を中略・設問の為の改変をしている。

感覚自体が技となるとはどのようなことか。

イチローは、この感覚の^{わざ}技法を体現し、また明確に言語化している。イチローは、一九九九年のシーズン①ジョバンのあるゲームの最終打席のバッティングの感覚を特別なものだったと言う。幼いころから膨大な練習を積み重ねて研ぎ澄ましてきたバッティングの感覚さえも捉えきることのできなかつた感覚を、その打席で得たというのである。ずっと探しもとめてきた感覚をあたえてくれたこんな打席とは、素晴らしい当たりではなく、ボテボテのセカンドゴロであった。結果は最悪だったにもかかわらず、次の瞬間イチローは、嘘のように目の前の霧が晴れていく感覚を味わう。

『ああッ、これなんだ！』と思いました。これまで②捜し求めていたタイミングと体の動きを、一瞬で見つけることが出来た。それをあやふやにはなく、頭と体で完全に理解することが出来たんです」。最悪のバッティングでどうして謎が解けたのか。

【 A 】、自分のイメージと結果がずれる理由を感覚として掴んだということである。練習では無意識のうちに質のいい打球が飛ぶことが何度もあったが、なぜそういう打球が打てたのか、その確認ができていなかった、しかし、あのセカンドゴロを打ったとき初めてその理由が分かったとイチローは言う。

誤差を修正するセンサーを、このバッティングでイチローは得た。イチローはこれを幸運だと言う。【 B 】、見つからないままだったかもしれないという点では幸運だが、この感覚がもつ意味は、イチローがそれまで培ってきた文脈があつてこそはじめて生まれるものである。瞬間的な感覚が「意味」あるいは「明確な解答」をなすためには、それまでにさまざまな感覚が意識化して捉えられている必要がある。諸感覚がいわば一つの文脈をなしているということである。

意味が生まれるためには文脈が必要である。十数年意識と感覚を研ぎ澄ましてきたプロセスがこの文脈づくりである。ここまで型や技を数学的な比喻で捉えてきたが、イチローもまた、「方程式」や「定理」といった数学的な比喻を感覚の技法に対して用いる。イチロー

は一九九九年までに六年連続首位打者のタイトルを獲得している。しかし、九四年から九八年までの五年間は打撃の技術について悩み、何度も（一）奈落の底に突き落とされたという。それが実際、このセカンドゴロを境にバッティングが変わった。

「試行錯誤の時期はあつたけど、再び明かりが灯らないトンネルの暗闇に閉じ込められるようなことはないですから。それまでは分かりかけては消えてしまった感覚が、今では数学の定理のように明確に認識できている。二度と迷わなくていいわけですから闇雲に不安に③オチイることもない。バッティングのレベルはかなり変わったと思いますよ。打席を重ねることに確信が持てるようになって行きましたからね」。（新潮45別冊、p.26）

（二）一回きりで消えてしまう感覚が、数学の定理のように明確に認識できるようになる。これこそ感覚の技化の典型である。

型や技という言葉は、日本的なるものをイメージさせやすい。しかも、「技化」という概念は、よりインターナショナルである。感覚の技化にとつて重要なのは、④センサイな感覚をもつということ以上に、意識で感覚を確認する作業である。数学の定理がいつでも利用可能のように、瞬間的に生まれた感覚やイメージがいつでも利用可能であるようにするために、意識による確認が不可欠なのである。

意識と感覚をあたかも対立するものとして捉える二元論的な考え方があがるが、これは技術の実際に即してみると非生産的な二元論である。メルロー＝ポンティは『知覚の現象学Ⅰ』（竹内芳郎他訳、みすず書房）において、知覚と行為がセットになっていることを強調した。周りの世界を知覚するときには、自分の過去現在未来の行動がそこにふくみこまれている。メルロー＝ポンティはタイプを打つ作業を例にあげる。

私がタイプのままに坐るとき、私の手の下に一つの運動空間が拡がり、その空間のなかで私は自分の読んだところをタイプに打ってゆくのだ。読んだ語は視覚空間の一つの転調であり、⑤運動遂行は手の空間の一つの転調であつて、その場合、どのようにして、〈視覚的〉総体の或る表情が運動による或る仕方の応答を喚起して行くことができるのか、どのようにして各〈視覚的〉構造がついにその運動の本質をあらわにし、【 C 】その際に語を運動に翻訳するのに何も語や運動を一つ一つ⑥辿る必要がないのか——それを知ることが問題のすべてなのである。

熟練したタイプピストは、タイプを打っている最中に、「意図と遂行とのあいだの⑦ガッチを感じ得る」。意図と遂行とのあいだのガッチが感得されるとき、世界は身体を通して了解されているのだ。イチローは、「ボールというのは、バットに当たったときに捉えるものではなく、投手の手からボールが離れた瞬間に捉えるものなんです」と言う。

癖と技は、異なる。技は効果的であり、癖は効果とは関係がない。（三）癖は無意識的に行っているものであるが、技は本来意識的なものである。意識的に練習し、意図的に反復可能なものが技である。

意識的とは言っても、一つ一つの細かな動きに対して言語的な指令を下すということではない。動きを見つめる意識があるということである。結果としていい動きができたかどうかということ以上に、自分の動きを見つめる意識が鮮明であるかどうか、技においては問われる。反復練習が続けられると、その動きはやがて無意識の領域へ⑧沈黙していき、技として定着する。これが技の量質転化ということである。

(4) 教育の領域では、ある程度の反復練習が重要であることは、およそ誰でも知っている。しかし、その「ある程度」を具体的な数字として意識し、その数字を確信をもって実践できる者は必ずしも多くはない。何十回という単位の反復であれば、それを強制できる教師は多いかもしれないが、それが何百回何千回という単位になるにしたがって数は当然減ってくる。反復する事柄の設定を誤れば、反復しても益が少なく、時には害にしかならないこともある。【 D 】【 】, ある種の強制力をもって膨大な数の反復を課するには、教師のほうにためらいが生まれがちである。

サモアでは小学校から英語を教えている。私がホームステイをしていた家の子どもが通う小学校に、現地の文部省の許可をとって参観する機会を得た。

体格のいい三〇歳くらいの女性の先生が、小学校高学年をまとめて教えている授業を見た。その印象は⑨センレツなものであった。【 E 】【 】, 大きな声で例文を暗唱する回数が半端ではないのだ。不定詞を使った例文が黒板に十個ほど貼ってある。その組み合わせを変えながら、何百回も反復して声に出すのである。教室に机と⑩イスはあるが、その授業の時間内は全員が坐ることなく立ったまま授業を行っていた。

先生はすさまじいバイタリティで、テンポを落とさずに四五分ほどの授業をこのやり方で⑪カケヌケる。子どもたちもしつかりとこのハイテンポに合わせている。子どもが大きな声で例文を暗唱する回数は、百回や二百回どころではない。授業が完全なトレーニングの時間になっている。立って、時に移動しながら声を大きく出すというやり方が、すでに実践的である。坐って教科書を読むのとは行為の質が違う。

私は、いわゆる勉強は、スポーツの上達と同じ構造をもっていると考えている。上手に基本を設定し、基本を千単位万単位で反復練習することの大切さを身をもって確信すること自体が、学校教育の主たる目的だとさえ言ってもよいと考えている。

一時間で数百回も例文を暗唱する授業は、【 F 】【 】, 楽しい授業ではない。サモアの先生が体得している技法の論理を全教科にわたる課題として捉えれば、日本人の学ぶ構えは**⑫呈す**ことになるであろう。現在の日本で反復練習があまり流行らなくなっているのは、厳しさを一般的に嫌う事由が大きな背景としてある。しかし、それだけではない。反復練習は、その基本や型が優れたものでない場合は大きな**⑬ヘイガイ**を生みかねないものなので、教える側に誠意があるほど**⑭躊躇**を生むことになる。これは、自分で型をつくる場合にはなおさら切実な問題である。

問一 傍線部①から⑭に、漢字はひらがなで読みをつけ、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 【A】から【F】にあてはまるものを次の中から選んで入れなさい。

【それだけに しかも とにかく いわゆる たしかに つまり】

問三 (1) 「奈落の底に突き落とされた」の意味で、本文での使われ方として適切なものを次のア～エの中から一つ選んで記号に答えなさい。

- ア 地獄の底に至るほど、茫然自失の状態になった
- イ 抜け出すことのできない、どうにもならない状態になった
- ウ 物事の最終まで行きつき、果ての果てまで追いつめられた
- エ 将来に対する望みや期待を無くされ、不幸のどん底に落ちた

問四 (2) 「二回きりで消えてしまう感覚が、数学の定理のように認識できるところ。これこそ感覚の技法の典型である。」とあるが、「感覚の技法の典型」について、文中の言葉を用いて一〇〇字程度で説明しなさい。

問五 (3) 「癖は無意識的に行っているものであるが、技は本来意識的なものである。意識的に練習し、意図的に反復可能なものが技である。」とあるが、文章中の別の表現を用いて一〇〇字程度で説明しなさい。

問六 この文章の(4)「教育の領域」について、あなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。その際、「技法」、「反復練習」の二語を用いること。